



重症心身障害者入所の県内4施設

連携強化へ協議会構築

新生児集中治療室(NICU)の満床状態が課題となっている宇都宮病院が県の「サポートNICU受入体制」を受け、NICU退院後の重症心身障害児者を受け入れている県内4施設が「県重症心身障害施設連絡協議会」として関係機関との連携強化に乗り出した。9日には宇都宮市内で合同講演会を開き、各施設の現状について情報交換。協議会長の沼尾利郎(国立病院機構宇都宮病院長)は「さまざまな課題が解決できるような有効な機能させていきたい」としている。

近年は休眠状態となっていたが、昨年7月に宇都宮病院が県の「サポートNICU受入体制整備支援事業」を受託したのを機に、このほど再構築されることになった。

県保健福祉部によると、県内のNICU病床は昨年4月現在44床だが、入院の長期化などで常に満床。一方、同協議会の4施設の病床計350床もほぼ満床続きで、今後、施設や職員をどう確保するかが課題となっている。

また、在宅でケアを受けている人も相当数に上るとみられるが、個人情報保護の問題もあって正確な実態は把握されていない。そのため、患者や家族への

病床不足など解決図る

支援の在り方も手探り状態だ。

同協議会は、こうした課題の解決に向けた情報交換や人材育成

を行っている。9日の講演会では行政や病院の関係者、患者の保護者ら約100人が参加し、千葉県での先進事例や各施設の実態・取り組みなどについて情報を共有した。

(荻原恵美子)



重症心身障害者の受け入れ状況について施設ごとの説明が行われた県重症心身障害施設連絡協議会の講演会。9日午後、宇都宮市内

同協議会は10年ほど前、宇都宮病院、あしかがの森足利病院、星風会病院星風院、なす療育園によって発足。